フランクリン・D・ローズベルトの無条件降伏論

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>藤田 宏郎</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>甲南法学</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>号</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>未定</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>未定</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.14990/00000650">http://doi.org/10.14990/00000650</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
フランクリン・D・ローズベルトの無条件降伏論

藤田 宏郎

（甲南法学'07）48-1-1（1）
フランクリン・D・ローズベルトの無条件降伏論

Lethy（列兵）統合参謀長、アーノルド（Henry H. Arnold）陸軍航空隊司令官、キング（Emmet IC. King）海軍作戦部長の四人の軍の首脳たちは、この会議に出席していたが、会議での重要な終戦方式について彼らによって討議がなされた記録は残っていない。

カサブランカ会議は、一九四三年一月十六日から二十四日まで開かれており。同年一月七日の米英合参謀長会議で、無条件降伏について、次のように言及した、同会議の記事録に記されている。一月十八日までの間のチャーチルとの内閣会談の中で、ローズベルトはチャーチルの意見を聞いたと思われる。

「首相（チャーチル）は、連合国は最終まで戦う決意である。ドイツ、日本の無条件降伏が達成されるまでに、努力を捱めない、といった趣旨の声明を発することを提案した。ただ彼は、その声明を発する前に、ロンドンの戦時内閣の同僚と相談したと言った。」

一月二十日、チャーチルは、ローズベルトとの首脳会談に関する戦時内閣への報告の中で、次のように無条件降伏についての閣議の意見を問うた。

「...われわれは、正当な時に、会談の結果について新聞発表の声明書を作るつもりでいる。その声明書の中で、英米両国は、ドイツと日本の無条件降伏をもたらすまで彼を憎しむことがないことが、イタリアを除いたのは、この国の対戦線の離脱を促進するためである。大統領（ローズベルト）は、このアイデアを好んでいる。これはあらゆる国のわれわれの友人を元気づけることであり、われわれのわれわれの友人を元気づけることが必要である。」
フランクリン・D・ローズベルトの無条件降伏論

十三日遅くまで新開向けコミュニケの準備作業に追われ、大統領特別顧問のホプキンス（Harry L. Hopkins）のメモによると、コミュニケの修正は、一月二十一時十五分にようやくポツンと、ちょっと修正をした、ローズベルトが若千修正をした、同日午前十一時十五分にようやくポツンと、コミュニケの最終案を得ることとなり、コミュニケの最終案は確定させていなかった。一月二十四日、ワシントンで発表された共同コミュニケには、無条件降伏について何ら言及していなかった。

しかし、ローズベルトは、一月二十四日、この共同コミュニケ案確定後の午前十二時過ぎから開かれたチャーチルとの共同記者会見の席上、このように無条件降伏について語った。

－ドイツ、イタリア、日本の軍事力の除去は、ドイツ、イタリア、日本の軍事力の除去は、ドイツ、イタリア、日本の軍事力の除去は、ドイツ、イタリア、日本の軍事力の除去は、ドイツ、イタリア、日本の軍事力の除去は、ドイツ、イタリア、日本の軍事力の除去は、ドイツ、イタリア、日本の軍事力の除去は、ドイツ、イタリア、日本の軍事力の除去は、ドイツ、イタリア、日本の軍事力の除去は、ドイツ、イタリア、日本の軍事力の除去は、ドイツ、イタリア、日本の軍事力の除去は、ドイツ、イタリア、日本の軍事力の除去は、ドイツ、イタリア、日本の軍事力の除去は、ドイツ、イタリア、日本の軍事力を除去するのである。この言及についての言及がないことに異議を唱えず、そのまま承認していたのである。13

チャーチルは、記者会見の席上、このローズベルトの無条件降伏の発言について、少なかったら驚いた、と述べている。彼は、事前無条件降伏についての戦時内閣の意向を問いあわせ、自らも承認していたにもかかわらず、何故驚いたのだろうか。それは、新開向け共同コミュニケ案作成の過程で、ローズベルトは、案に無条件降伏についての言及がないことに異議を唱えず、そのまま承認していたのである。13

いずれにせよ、カサブランカでの記者会見におけるローズベルトの発言は、ドイツ、イタリア、日本の国民の絶滅を意味するのでない。何故驚いたのだろうか。チャーチルは、後に「われわれが同意したコミュニケについて言及するとは思っていなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなかったのでなく、戦時内閣の意向を問いあわせ、自らも承認していたにもかかわらず、ローズベルトは、案に無条件降伏についての言及がないことに異議を唱えず、そのまま承認していたのである。

結論は、これら諸国の無条件降伏であるという原則を確立することになった。15
二、無条件降伏原則宣明の背景

R・シャーウッド（Robert Sherwood）が書いているように、無条件降伏に関するローズベルトの宣明は、記者

会見の場での言葉の思い付きではなく、ローズベルトの深く考慮した政策の表明であった。18

戦争終結方式としての無条件降伏原則は、すでに国務省の戦後対外政策諮問委員会（The Advisory Committee on

Post-War Foreign Policy）の安全保全問題小委員会（The Subcommittee on Security Problems）からローズベルト

に、同小委員会の検討結果として報告されている。同小委員会は、一九四三年五月六日、第三回会議を開き、戦

争終結方式について討議し、戦争の終結には、休戦と無条件降伏があるが、休戦は交渉による戦争終結方式として

考えられるが、ドイツと日本には無条件降伏を要求する、という事を全員一致で決めていた。同小委員

会の委員長デーヴィス（Norman H. Davis）は、五月二十一日の第四回委員会で、前回会議での検討結果を大統

領に報告したところ、大統領も同じ考えであったと述べている。19

という言葉は「無条件降伏」という語とは、前者が勝者、後者が敗者、平和を立った言葉とすれば、後者は敗者の平和を立つ語と

いう違いはあるものの、基本的には、中途半端な交渉による休戦方式を否定する点では相反しない。この意味で、

デーヴィス委員長が報告した際に、中途半端な休戦方式を否定する考えをもっていたローズベルトが自分も同じ

（甲南法学'07) 48-1-6 (6)
フランクリン・D・ローズベルトの無条件降伏論

考えである。述べたのであれば、自分の考えを表明するのに適した、戦争に対する米国の強い意志を示す語とは、この時、この無条件降伏という言葉が彼の心に記憶されたと思われる。ローズベルトは、デーヴィス委員会から、「無条件降伏」という言葉のアイデアをえたということである。それは、カサブランカでの宣明の八ヵ月前のことである。

さて、ローズベルトはカサブランカでの宣明後、国内外より無条件降伏についての修正・批判の動きに触れ、ной和を乱す侵略戦争を始めないうちに、徹底してその軍事力を除去し、他国民の隷属を征服に基づく彼らの哲学の破壊が必要となる、との考えである。従って、これら枢軸諸国との交渉による和平は有り得ないことであり、彼らの降伏は無条件でなければならない。

また、その後ローズベルトがこの原則を宣明した理由として、次のようないくつかのものが考えられる。

第一に、ドイツが初めて大戦において、戦場で決して敗れたのではないという主張が再びなされることがないように、今度は彼らが完全に敗北したことを強制的に認識させる、ということが必要である。無条件降伏についての話し合議は、九四二年五月三日の第三次安全保障問題小委員会で、委員のロング（Breckinridge Long）国務次官補は、「われわれはこの前の戦争（第一次大戦）の終結時に、無条件降話をもたなかたため、と会議の議事録は記している。この点について、デーヴィスは、無条件降伏が必要であることをの理由の一つとして、大統領に報告されていたと思われる。

（甲南法学’07）48-1-7 （7）
ローズベルト自身も、一九四四年七月二十九日の記者会見で、記者の「無条件降伏の立場は依然として変わらない」という質問に対して、「すべてのドイツ人は、この前を通じて降伏した事実を否定している。しかし、今度

第二に、戦線においては、ロシアを激昂するといった目的からのことであったと考えられる。

カサブランカ会議の公式コミッショネは、ロシアに、この前を通じて降伏した事実を否定している。しかし、今度

記者会見で、ローズベルトが無条件降伏を宣明したのは、米英のわれわれも敵国の無条件降伏にいたるまで最後まで戦い抜くといった意向をスターリンに伝えることを意図したとも考えられる。カサブランカ会議に先立つ一九四三年一月七日の米統合参謀長会議で、既述のとおり、ローズベルトは、ロシアの戦線における軍事状況をスターリンに知らせる、と述べている。まだいくつかローズベルトの宣明の理由も考えられよう。以上述べた主として三つの理由から、ローズベルトは、カサブランカで無条件降伏であることをスターリンに知らせることが、戦争の終結を意味し、勝者の「一方性の貫徹」を特徴としている。故に勝者があの宣明をすることになったといえる。

無条件降伏という言葉は、一見、明瞭な語のように思えるが、必ずしもその意味するところは、明確ではない。

デーヴィス委員会が指摘しているように、無条件降伏とは、戦争終結に際して、交渉による体裁を拒否し、強制的に降伏させること、（勝者が一定の条件を

（甲南法学’07）48-1-8（8）
フランクリン・D・ローズベルトの無条件降伏論

三、無条件降伏原則への批判と修正の動き

（米国内）

ローズベルトが、既述のこととく、無条件降伏について初めて言及したのは、一九三三年一月七日の米統合参謀長会議においてであった。この時は、戦線において孤立感を深めているスターリンに到達するまでわれわれ連合国は戦い続け、その唯一の条件は無条件降伏であることをスターリンに知らせといったニュアンスで、さらげなく無条件降伏について初めて言及したのは、一九四三年一月七日の米統合参謀議においてである。そして彼らが気づいていたとしても、大統領から意見を求められていな限り、このような政治・軍事目的にしたがって特別に意見を言うことは難しかったと思われる。従って、無条件降伏についてこの会議では討議の対象になって

（甲南法学’07）48-1-9（9）
論

いらない。会議に出席していたマルシャル陸軍参謀総長は、側近のウェデマイヤー将軍に、「この会議で、初めてカ

サプランカで議論されるかも知れない無条件降伏の方式についての言及があった」と語っている。それでは、この問題は、米、英両軍首脳部によって、カサプランカ会議で議論されたのであるのか。カサプラン

カ会議中の米英合参謀長会議及び米英合同参謀長会議ともに、この無条件降伏について議論された記録は残っ

ていないが、一月十八日の米英合同参謀長会議で、チャーチルが、ドイツ、日本の無条件降伏について議論され

た局長から無条件降伏について開かれた際、無条件降伏は違いない、ドイツを最後まで戦わせることになる

う」と述べ、この自分の意見をカサプランカの米英合同参謀長会議のいずれの会議の公式議事録にも、ウェデマイヤーの無条件降伏

に関する発言は記録されていない。またカサプランカで、ウェデマイヤーの回想にあるように、彼がカサプランカの参謀長会議のいずれにおいても、この問題は全く議論されなかったと

たし、否定している。ウェデマイヤーの回想にあるように、彼がカサプランカの会議で、オフロドで彼が意見を述べた可能性は否定できない。すなわち、マルシャルは、カサプランカの会議で、本当に無条件降伏について明確

な考えをもっているのを知り、簡潔にこの問題について意見を述べるように言った」とウェデマイヤーは回想し
この無条件降伏原則は、ローズベルトが軍当局者を含め誰と相談せずに決めたことだけに、またそう考えを明らかにした後も討議の対象とはしなかっただけに、軍当局者がそのことについて議論するということは、無条件降伏は軍事目標であったが高度の政策問題でもあっただけに、現実には難しいことであったろう。従って、カサブランカで驚くべき出来事があった。それは、大統領と首相が出席して開かれた最後の記者会見で、無条件降伏の原則が発表されたことであった。私の知る限り、この政策は、米英合同参謀長会議では討議されなかった。軍事的観点からすれば、この政策はわれわれが敵を破壊しなければならないということを意味する終戦前の地域では条件付降伏を認めることがよかったかも知れないいくつかのケースがあったが、それが、大統領の軍事顧問であったリーヒ総合参謀長は、無条件降伏について、次のように語っている。

一方、一月七日の会議を始めとして、カサブランカの米統合及び米英合同の参謀長会議に常に出席していたキ
論

説

長戦海軍作戦部長も、戦争が進む中で、「このローズベルトの心においてスローガン（無条件降伏原則）が間違/ている。

他方、陸軍参謀総長のマーシャルはこの原則についてどのように考えていたのであろうか。彼はウェデマイヤーの回想録にも出てくるように、大統領の考えとはいうものの、カサブランカ会談当時、重大関心があったかどうかについては別にして、この原則の問題性には気付いていたと思われる。

もし無条件降伏方式が存在しなかったならば、実際のところ、ドイツ人と日本はもう少し早く戦争の敗北を認めたかも知れない可能性があったと思う。しかし、私はその宣言がマーシャル（筆者注：カサブランカの間違）でなかった時、ドイツ人同様、わが国民、英人は一般的に連合国の国民に大きな心理的影響を与えられたと思。なぜならば、われわれは戦闘における敗北の時期を脱しつつあり、今われわれは、その終結へ向けて動

マーシャルは、秉承国及び連合国の諸国民に与えたプラスの心理面での影響を評価している。後にマーシャルは、インタビューで、記者からの「無条件降伏方式を放棄させるよう試みたことがあるか」という質問に対して、「そのようなことをした記憶はない」と答えている。
の問題について表立って批判・修正の意見を積極的に述べることはできなかったであろう。ただリヒトは、大統領の軍事顧問という立場から修正意見を述べることは可能であったろう。しかし、全くこの問題について、「米統合参謀本部はこの問題について協議した」と語っている。だが、「その協議から何らかの意義のあるようなことが生じたことがある」と述べている。

このように、ワシントンの統合参謀本部は、原則の修正へ向けた動きには積極的でなかった。一方、エルバの米英連合軍の首脳たち、必ずしもそうではなかった。一九四三年四月十二日、当時国務次官であったステイニング（Edward R. Stettinius, Jr.）がヨーロッパ連合軍総司令部を訪れ、この時、ステイニングは、これに両将軍との会談の結果、四月十三日、両将軍が、敗北後のドイツ処理の基本原則を明らかにする必要があるとした。その後、無条件降伏の意味を明確化するアスの電報をローズベルトに送ったところ、ローズベルトは「ここに影響する返事を、送る前に必ず私の承認を求めるようにしない」とハルに書き送っている。
論

無条件降伏という原則は、核戦争と舞信諸国に対するわれわれの政策とそれら諸国の将来に関するわれわれの計画に暗影を投じることになった。本来、この原則は国務省の考えたことでもなかった。一九四三年一月のカサプランカ会談中に、大統領が、チャーチル氏も同席した新聞記者会見で、突然このことを発表した時、チャーチル氏同様われわれも非常に驚いた。

この発言から、ハルは、ローズベルトから事前に無条件降伏について相談を受けなかったが、その発言について、即座に消えてしまうわけでもない。ただ不可解な点は、本来、この原則は国務省の考えではなかった。一九四三年五月一日の国務長官が主宰者となっていながらも、大統領の両方の方法で検討していた。大統領も同様考えであったと、その後の会議で述べている。ただ総論委員長が、委員会で検討したことを大統領に報告した時、委員会での討議の会議で彼が、上書のハルに報告せず、特に親密であった個人の関係から大統領に提出された報告書を受けていた。一九四八年に出版されているが、とてもどちらかである。ただ軍事長官と同様、ハルも大統領から、この問題について発表前に相談を受けいなかったことは事実である。
ハルは、無条件降伏について、多くの同盟の人たちと同じく、次のような二つの理由によって、この原則に反対であったと言っている。

「一つは、これは枢軸国を絶望させ、その抵抗をより一層強固なものにすることによって、戦争を長引かせるかもしれない点であるった。しかし、ハルは、大統領がカサブランカであんなに強くこの原則を述べた以上、われわれは少なくとも形式上の対応し、大統領に原則の修正・緩和へ向けた動きを求めることがになる。」

「一九四三年十二月三十一日、モロトフ（M. Molotov）ソ連外相がハリマン（Averell W. Harriman）ソ連駐在米国大使に会った際、無条件降伏という言葉の意味と、この問題についての米国政府の態度について聞いてきている。とし、ハルは、一九四四年一月十四日、無条件降伏についての何らかの公的定義に関してソ連、英国ともに国の三カ国で協議してはどうかという覚書を大統領に書き送った。これに対して、ローズベルトは、一月十七日、次ののように回答している。

「率直に言って、[無条件降伏]という言葉の定義をするために、会議を開くことには賛成ではない。……ドイツ人には、私がクリスマス・イブの演説で話したことを嘘なく繰り返して言うかもしれない。すなわち、われわれは、ドイツ人を破滅させるつもりはなく、彼らが現在の徴服哲学を除去するという条件付きで、他のヨー...

（甲南法学’07）48-1-15（15）
フランクリン・D・ローズベルトの無条件降伏論

「たるすることは間違いないであろう。」

一九四一年八月の大西洋憲章当時と一九四三年のカサブランカ会議の時には、ハンガリー、ブルガリア、ルーマニア、フィンランドは、枢軸側の衛星国であった。しかし、これら諸国は、ドイツ、イタリアがわれわれの敵であったのと同じ意味での敵ではなかった。これら四つの小衛星諸国は、ドイツ、イタリアがわれわれの敵とされた。だから、例外をもうけるのは間違いないであると思う。イタリアは無条件降伏の場合はそうすべきである。ルーマニアは無条件降伏の場合はそうすべきである。

私がこの問題について深く理解しているが、何としても無条件降伏の原則を放棄したと言ったわけではない。具体的な例が生じる前に、一般的原則に例外をもうけることは、極めて危険なことである。もし原則にいくつかの例外をもうけたならば、その後にすべての場合にその例外が適用されるということになるのをわれわれは知っている。

私は、あたらしい四月四日付けの、ヨーロッパの枢軸側の衛星諸国に対する無条件降伏適用の例外扱いについての覚書を読んだ。私はこの問題について深く理解しているが、何としても無条件降伏の原則を放棄したと言ったわけではない。具体的な例が生じる前に、一般的原則に例外をもうけることは、極めて危険なことである。もし原則にいくつかの例外をもうけたならば、その後にすべての場合にその例外が適用されるということになるのをわれわれは知っている。

ローズベルトは、翌日、次のように返答をしている。

ハルは、お前の四月四日付けの、ヨーロッパの枢軸側の衛星諸国に対する無条件降伏適用の例外扱いについての覚書を読んだ。私はこの問題について深く理解しているが、何としても無条件降伏の原則を放棄したと言ったわけではない。具体的な例が生じる前に、一般的原則に例外をもうけることは、極めて危険なことである。もし原則にいくつかの例外をもうけたならば、その後にすべての場合にその例外が適用されるということになるのをわれわれは知っている。

以上見てきたこと、ハルは、ソ連、英国の意向もあり、原則の修正・緩和について何度かローズベルトを説得しようとしたが、すべて失敗に終っている。ハルは病気のため、一九四四年十一月二十七日、国務長官を辞任し、十一月三十日、国務次官のステティニアスが国務長官職を継いだ。ステティニアスは、国務長官に変わってから、主として米国が中心となって進めていた国際連合の設立準備作業に追われ、またローズベルトの無条件降伏
原則についての固い意志を知っていたからか、前任者のハルと違ってこの問題で、その意味の明確化、修正に関し大統領協議するという事はしなかったと思われる。むしろ、この問題については、ローズベルトの意向をそのまま受け、ローズベルトの代弁者としての役割を果たしていたというものである。そのために、米英連合軍総司令部の意向を代表して、総司令部のドイツ一月十六日の電報で貴下にすでに伝えたように、無条件降伏は絶対的な政策であり、この政策の維持の立場を繰り返し述べた。では、無条件降伏は、カサブランカ会議以来、米国政府によって確立として維持されている政策であり、いかなる形での変更も修正もなされてこなかった。ドイツに対する軍事行動の最終局面にある現在、委員会は、無条件降伏の主張によって、ドイツ軍の死力を尽しの戦闘が助長されていた。……英）ソ連両政府は、この無条件降伏というスローガンは必要でない戦争を長引かせることになったとしていると結論づけた。そしてアイゼンハワーもこれに同意した。彼の幕僚のわれわれ数名は、イタリア降伏のために作成された取決めに似たものの提案をどうやるべきか詰めかけられた。
フランクリン・D・ローズベルトの無条件降伏論

(1) 英国とソ連

英国及びソ連は、ともにヨーロッパにおいて一般市民の犠牲を伴いながら、ヒトラーと死闘を演じている立場から、ドイツとの戦争を長引かせる可能性のある無条件降伏原理には賛成ではなかった。すなわち、ロンドンの戦時内閣もこの考えに反対していた。ただ英国としては、戦争遂行に際して多大の米国からの援助を受けていないことや、対日戦における英国有する米国の動念を払拭する必要性から、積極的にこの原理に賛成したというよりは、賛成させる力をえなかった。チャーチルは、サブランカ会議中の一九四三年一月二十日、戦時内閣への会議内容報告のところでも、米英合同参謀長会議の討議の過程で、ドイツ敗北後直ちに、英国有戦争より離脱するのでないかという懸念が米国代表によって表明されたのを知って、私は、われわれの利害関係も名誉もともにかかっていることについては、明確に述べることが正しいと思った」と書いている。英国としては、米国との戦時における関係を決意していることも、戦争を継続するとの決意を表明する必要があっただろう。その意味で、ドイツと同様、日本との戦争終結方式として、ローズベルトが提案した無条件降伏原則には賛成せざるをえな
フランクリン・D・ローズベルトの無条件降伏論

についてローズベルトに話したことがないというわけではない。たとえば、彼はヤルタ会談で、日本の降伏に関
して、ローズベルトに無条件降伏の緩和を求めている。すなわち、一九四五年二月九日のヤルタでの米英合同参
謀長会議の席上、チャーチルはローズベルトに次のように語りかけている。

「もし、ロシアを、米国、英国、中国ともに、四ヶ国による日本に対する無条件降伏を要求し、降伏しなけ
れば四ヶ国の全軍事力による圧倒的な重圧を受けることになるとする最後通告を出すことに賛成するよう説得
できれば、それは極めて大きな価値をもつだろう。」

米国が判断することになるならば、それは疑いない価値のあることである。

ただし、彼は言葉を緩い、もっとも英国は条件の緩和を強要するものではない、米国の判断に従うつもりで
ある。どのような決定であれ、英国はこの問題について最後まで見届けるつもりであると述べ、あくまでも控
え目の提案をしている。

これに対し、ローズベルトは、次のように答え、実質上、チャーチルの提案を拒否している。

「そのことは、スターリン元帥に話してみてもよかろう。しかし、そのような最後通告が日本人に大きな効果
をもつかどうかは疑わしい。日本人は外部世界で何が起きているかを認識しているようには思えない。いず
れも日本は満足すべき妥協が得られる状況に目覚めるのではいないであろう。」

彼らは実におかれている状況に目覚めるのではいないであろう。
件降伏原則は批判せず、その後の修正等の動きについては、特に今ずしも控え気味であったといえる。しかし、ソ

連はこの英国の姿勢とは異なり、対等の立場から、ドイツに対する無条件降伏修正については率直に言及してい

る。

一九四三年十一月のテヘラン会議の際に、スターリン元師は、無条件降伏原則を批判し、その修正の提案をしてい

る。まず十一月二十八日のローズベルト、チャーチル、スターリンの三国首脳会談の際に、米国側の通訳として

会議に出席していたポーレン (Charles Polk) の発言によると、スターリンの三条件降伏の妥当性について問題にし

た。彼は、無条件降伏の意義を明らかにしないままにしておくことは、た

だドイツは極力結東させることになるだけである。それに反して、どんな厳しいものでも、明確な条件を作

成し、この条件がドイツ民にとって受け入れなければならないものであることを彼らに告げることは、自

の意見では、ドイツの降伏を早めるということになるであろう、との所感を述べている。

この発言によれば、この無条件降伏の問題は、十一月二十八日の三国首脳の晩さん会で取り上げられたが、ロー

スベルトは従来見なかったので、当然スターリン発言に対するローズベルトの意見は記録されていない。

（甲南法学'07）
フランクリン・D・ローズベルトの無条件降伏論

イッに関する限り間違った策であり、連合諸国は共同で条件を作成し、ドイツ国民にその条件を知らせるべきだ

とローズベルトに告げた。傍点は筆者「ハル国務長官は、同日、英国外務省のこの覚書をローズペ
ルトに送ったところ、ローズベルトは翌日、三月二十三日、「テヘランで、この無条件降伏の問題
とところでは全く取り上げられることはなかった」と回答している。」

このように、ローズベルト自身も否定し、ボーレン覚書でも、十一月二十八日のローズベルトがいないところ

で、この無条件降伏の問題が取り上げられたとしているが、英国外務省は、翌日の二十九日、ローズベルトが出

席していた会議で、スターリンが無条件降伏について発言したとしている。チャーチルも、ローズベルトへの一

九四四年三月二日付けの私信で、「ハルは、貴方が無条件降伏に関するスターリンの発言について何を含み、また何を含まないかという

ことを、ある局面でドイツ人に告げることを考えてもよろこうと思うという趣旨のスターリン発言を大変興味深

く聞いた。……またアンソニー（スターリン元帥）は十一月三十日、次のような電報を英国外務本省に送っ

た。「昨夜（十一月二十九日）、スターリンの図書館とチャーチル、外務省の英国外務省との間で、ローズベルト

にボーレンの原則修正提案について聞いたかどうかについては見解が分かれているので、ローズベルトに直接

判断したからであろう。しかし、いずれにせよ、スターリンがテヘランで無条件降伏原則の修正を提案したこ

が、英国側がこれに応じたかどうかについては、ローズベルトに直接発言が、ローズベルトに原則修正を迫る上で有利になった

と私は事実であり、もしローズベルトがスターリンの意見をテヘランで聞いていなかったとしても、後日、スター

（甲南法学‘07）48-1-23（23）
フラグリン・D・ローズベルトの無条件降伏論

くに拒否している。またその意味の明確化を問われた際には、彼は常にグラントとリーの米国の南北戦争の故

事をも出し、それで無条件降伏の意味分かることを答えている。ローズベルトが、無条件降伏の意味を問われ

たびにもし出たグラントとリーの会見の席上においてであった。そこで彼は次のように語っている。

ノルルにおける記者会見の席上においてである。「もしわれわれが『無条件降伏』という言葉を変えたならば、ド

イツはもっと早く降伏するだろうという教養のある高潔な人々による多くの批判がされている。……彼らはそれ

ないとして批判している。このことについて少しはかり説明しておこう。

話は、リッチモンド（Richmond）のコーネルバックに追いつめられた。彼の軍隊は飢餓状態にあり、二、三日

間眠らず、武器、軍食も事実上使えない。そこで、リーは、休戦の白旗をかげ、部下のことを考えて、グ

ラントは、『それは出来ない。自分としてはかながいかの物を得なければならない。』と答え、彼

はさらに、『私の騎兵たちの馬はわれわれのものではなく、われわれの将兵のものであり、彼らはその

各自の馬を故郷に連れて帰らなければならないうね』と述べた。
フランクリン・D・ローズベルトの無条件降伏論

ローズベルトのこの事実誤認はともかく、無条件降伏の意味として、彼がこの故事について詳しく語っているが、その話の内容から彼が無条件降伏の意味についてどのように考えていたかが推察できる。つまり、ローズベルトが考えていた無条件降伏とは、戦争において、まずは敵国側の敗者が必要な選択肢をつけるために戦争を引き起こすことをすることである。具体的に敵国である枢軸国に対しては、勝者による敗者に対する最大の取り扱いについて、場合によっては、勝者による敗者に対する寛大な取り扱いもあるということもである。

ローズベルトは、カサブランカでの宣明に際して、「それ(無条件降伏)は、ドイツ、イタリア、日本などの国民の破滅を意味するのでなく、他国民の征服と隷属に基礎をおくこれら諸国の哲学の破壊を意味する」と述べ、また彼は、一九四四年一月十七日、ハル国務長官への覚書の中で、「われわれは、ドイツ人を破滅させるつもりはなく、彼らが現在の征服哲学を捨てること」ということをわれわれは望んでいると書いていることは、既述のとおりである。

Transcript of Press Conference January 24, 1943. PP. 727.


FRUS: Committee, 1943, pp. 727, 837.


FRUS: Committee, 1943, pp. 727, 837.


Mediation Reports, p. 186.


William D. Leary. I Was There: The Personal History of the Chief of Staff to President Roosevelt and Truman. Based on His Notes

Mediation Reports, p. 186.


Mediation Reports, 1964.


Memorandum of Marshall’s Views as Expressed During the Evening of November 28, 1943 (Bothor Supplementary

Vela, 1943, p. 826

December 17, 1943, PRUS 1944 Vol I, p. 446


Memoir of Roosevelt in the Secretary of State to President Roosevelt, March 25, 1944, PRUS 1944 Vol I, p. 484.

Memoir by the Secretary of State to President Roosevelt, April 10, 1945, PRUS 1945 Vol III, pp. 292

Memoir of Roosevelt in the Secretary of State to President Roosevelt, April 3, 1944, PRUS 1944 Vol I, p. 590.

Memoir of Roosevelt in the Secretary of State to President Roosevelt, April 4, 1944, PRUS 1944 Vol I, p. 592